

身延山布教の特殊性

結 城 瑞 光

過去六ヶ年の教壇生活から突如布教戦線へ出動を命ぜられて静穩なるべき象牙の塔を遙か霞の中に遺して騷亂來るべく抗争續くべき實際社會の眞只中に送り出されたのは昭和七年櫻花爛なる四月の中旬であつた、武装も戦備もない遽造りの初年兵帷幕に廻らす賢疇は持合せぬが無謀の勇敢が可憐な強さと自負してゐる、然し初年兵でも布教に従事するものとして現宗團の布教の制度及び其實際を知ることには必要であると思ふ。

動機が如何にあらうとも布教は教家の生命である以上は入團したものは形式の相異を問はず布教の爲に献身的努力が當然の責務だ、然し事實の宗團は反動的趨勢にある、既成宗團の無氣力なのは布教に無自覺な分子を多分に包含するからだ、之に對して新興宗教が躍動するのは守備より攻撃的精神が熾んであり、犠牲的行爲に自己満足を得るからである。

我宗も既に宗法第一章第一條に

諸佛出世ノ本懷最爲第一ノ法華經ニ根據シ宗祖日蓮釋迦所立ノ宗ヲ開キ本教ノ妙旨三大秘法ヲ宣布シ末法ノ機縁ニ之ヲ奉持セシメ以テ即身成佛ノ妙悟ヲ得セシムルヲ教旨トス

とある、條文中三大秘法を宣布しとある、宣は遠く及ぶ、普及するの意であり布も又ふれといふ意味だ、一所に停滯固執すべきでなく所有機會に所有方法で三秘の大法を宣布せねばならぬ、果して如實に全員が遵奉して居るであらうか、個人は擱いて宗門政策としての布教制度から見やう、布教の範圍を二大別して内地と外國とし、内地を十八の教區と樺太、臺灣、朝鮮と之に相接する滿洲を便宜上内地並に取扱つた開教地とに分ける、内地の十八教區には各々布教監を置き他の開教區には開教司監を置く、教區布教監の許に五名以上の專任布教師があつて地方の布教を直接擔當する、此外管長の命令に依る派遣布教師、駐在布教師及び特命布教師がある、更に巡教監があつて常に教區の布教師の勤惰調査及び布教成績等を巡察する、勿論管長の親教もある、外國布教は駐在布教である、而して内外を問はず布教師養成のために布教院を設けてある、年度の布教豫算は收入約拾七萬五千圓に對して約參萬七千五百圓、此中には日蓮主義發行補助費壹萬圓も入つてゐるが、別に臨時部として約三千圓の傳導補助費があるから加算して約四萬圓を計上してゐる（昭和六年）宗費の四分の一の割合だ、他の大宗團と比べては遜色があるが、組織と計費の点から云へば小規模ながら先づ形は備つてゐると云へる。

因に他宗の豫算中曹洞宗の豫算は約四十三萬圓、眞宗本願寺派約八十三萬圓、淨土宗約十八萬圓、

日蓮宗約拾七萬圓（昭和六年度）

然し布教の結果から觀察した時宗門布教の實況は眞宗又は天理教のそれと比較してどうであらう、何處となく物足りなさとい時騒ぎの感があるまいか、直接宗門布教師諸聖の口からも漏れることがある、何に原因するのであらうか。

布教の對象は宗教的教化である、單なる道義の涵養でもなく社會改善の爲のみでない、信仰の獲得を傳導するのが目的だ、最高至純な人を作り國を造るのが究極だ、此の爲には整然たる理論も必要であるが潤色された慰安も無ければならぬ、即ち智情意の完全な融合統一が布教の成果である。若も之が實現し得ぬとすれば布教の目的が達しられないのである、然し成就是困難としても實現への過程の努力が布教師の使命である、宗門の布教戦線に異常のあるのは努力こそすれ目的への潤色された慰安が缺けてゐるのに因るのである。

信仰の内容として智識と意志の確定は爲し得ても情愛の充足は徹底し得ぬものだ、茲に其宗教の開教者を追慕することになる、壽量品の咸皆懷戀慕而生渴仰心又は令其生渴仰 因其心戀慕等の心的状態となるのは凡そ信仰を抱くものゝ通有性である。宗門人の等しく宗祖を戀慕渴仰するの情念は絶對

的であり確實的である、此の觀念から遺物崇拜となり靈蹟護持も現れてくるのである、而して此遺物遺蹟にして若も開教者が自己人格の表現に尤も満足を得たるものなりと高稱した場合、既に情に於て融合を欲した信徒は期せずして無條件に受け入れるものである。宗門の布教が生氣を帯びないのは此點の考察が不足だからである。

宗務院なる宗政廳には此の本質は勿論ない、従つて努力はしても宗勢發展の上に伸張性が削減されるのである、宗勢今後の發展を心念する同人は鬱然として或る希望を擡頭させて來た。それは宗門の布教の發令、布教師の養成派遣を 靈山身延 に一任することである。

日蓮宗としての身延、宗祖の宣く、

日蓮が 弟子 檀那等は此山を本として參るべし

何故の分岐 何故の別動、宗門布教の統一活動は身延を忘れては不可能である。之が實現の曉は合本も合末も自ら解結しやう。余は唯之が目的であり、力説する所以である。

願て我身延現在の布教状態を見るならば、

布教は山規第三章第一部教學部に屬し法主の任命に依つて派遣、常任、駐在布教師を置く、布教師の役務は宗則の布教條例と相似るのである、宗務の布教監、宗務所長の役が觸頭又は末頭に類似する、

管長の親教が法主の親教で總てが同一規を行く感がある、然し内容に至つては唯整備の途上だといふより外はない、近來山務調査會が組織されたのも其の重点に布教部の擴充といふことのあるのは快心事である。特に大筆すべきは身延の學院である、現在學生數は百七十名程だが學校存立の方針が布教傳導の法器を養ふといふことである、此の方針は傳統的精神として不斷の花を咲かせてゐる、現今宗門で活躍する布教者中高見慈悅、柴田顛秀、湯川泰雅、齋藤純正、清水玄正、伊藤海聞、松木本興等々の諸師等其數、百名以上にも及ぶ、殊に身延出身である杉田前法主、望月現法主の如きは其の尤も傑出された方である、又布教師ならねど清水龍山、藤田文哲、小笠原日毅、澁谷文英師等々の學者又は冷泉要淳、中村是本師等の經倫家の大多數は身延の出身である。(物故者中には著名の士多數あり之を除く)凡そ寺門經營なり、社會事業なり又は布教なりに従事する人物にしても延山の風光に育成されたものならば眞の護法愛山の信念は人後に墮ちぬだけの自信はあり得る筈だ。

將來の布教戰線が身延を中心として放射線に敷かれた時宗門の再建造は躍々とした意氣と赫々たる光明に輝いて成し遂げられることに相違ない。

初年兵としての訓練は之からだが戰線は既に展開されてゐる、身延の山旗は翩翻として陣頭に樹つてゐる。